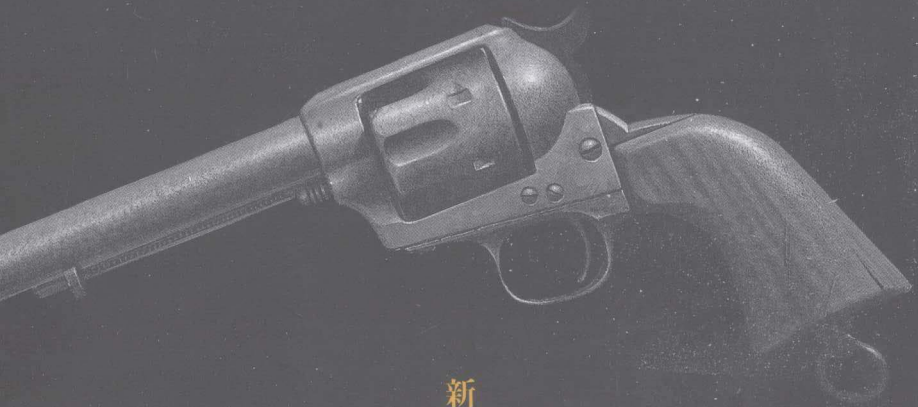
虎口からの脱出

景山民夫

新潮社

虎口からの脱出

景山民夫



新潮社

装画／辰巳四郎
地図製作／千秋社

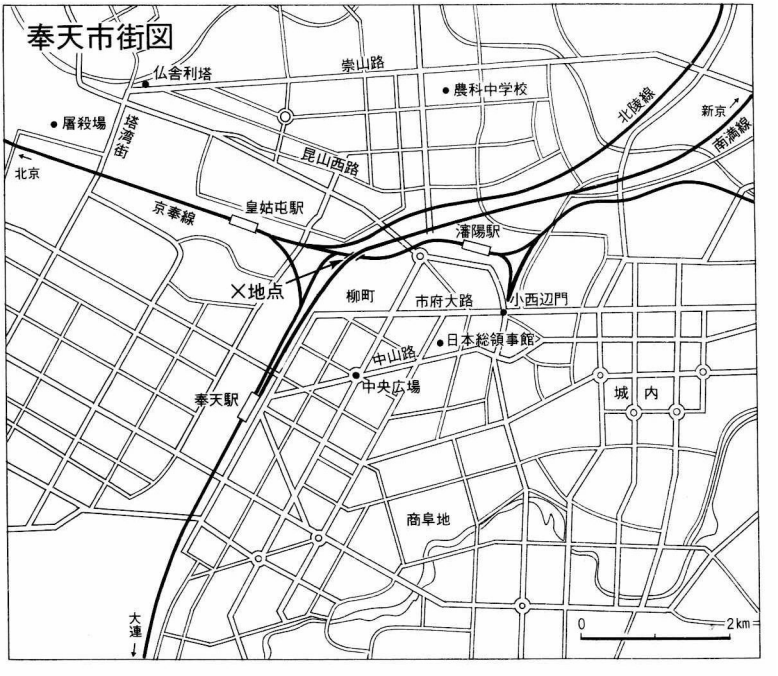
虎口からの脱出（だつしゅつ）

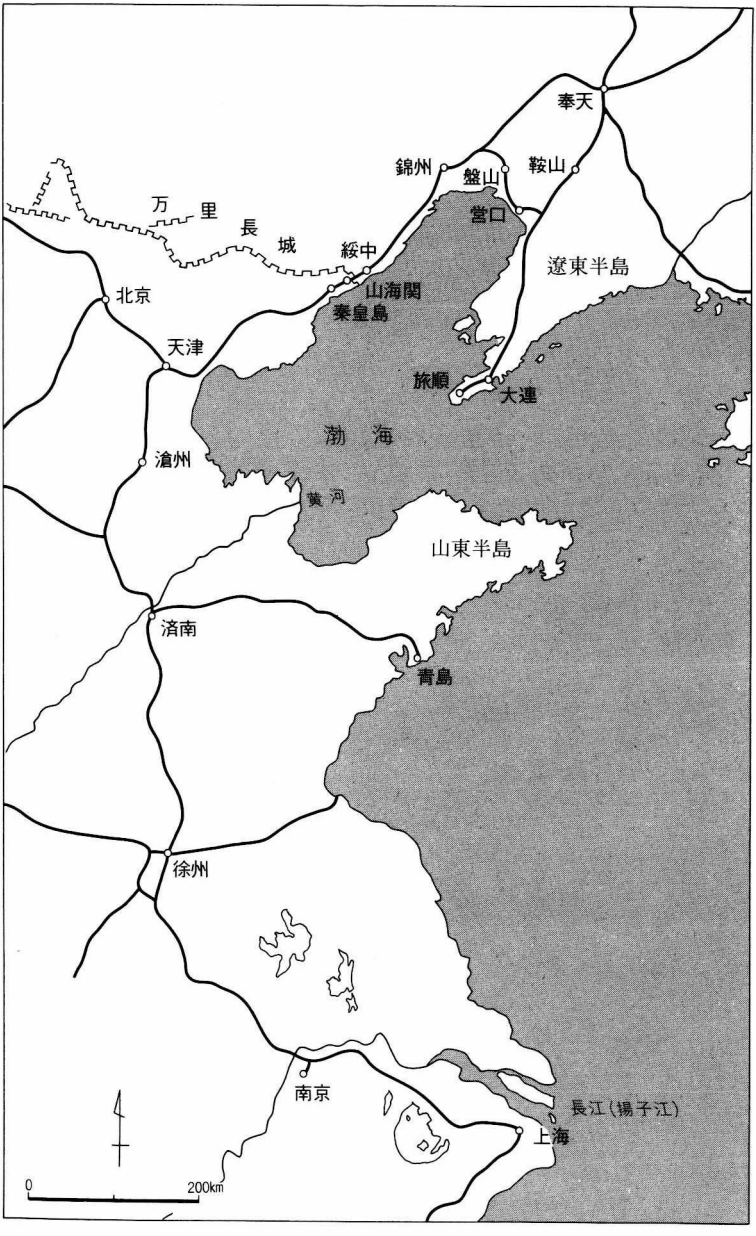
著者／景山民夫（かげやまたみお）
印刷／昭和61年12月5日
発行／昭和61年12月10日
発行者／佐藤亮一
印刷所／錦明印刷株式会社
製本所／加藤製本株式会社
発行所／株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一　〒一六二
電話〇三-二六六-五一一一（業務）・五四一一（編集）
振替東京四-八〇八
定価／一〇〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Tamio Kageyama. Printed in Japan, 1986.

ISBN 4-10-364601-2 C0093


奉天市街図
仏舎利塔
崇山路
農科中学校
屠殺場
塔湾街
昆山西路
北陵線
新京
南満線
北京
京奉線
皇姑屯駅
瀋陽駅
×地点
柳町
市府大路
小西辺門
日本総領事館
中山路
中央広場
奉天駅
城内
商阜地
大連
0
2km



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

虎口からの脱出

あの酒場で出会った
すべての人々に

プロローグ　1928年（昭和3年）4月6日　上海

頭の中で、酔いが重く湿った白い霧となって渦を巻いていた。

テーブルに突っ伏していた額を、無理矢理ひき剝がすようにして持ち上げると、鈍い痛みが後頭部から真夏の入道雲のようにムクムクと湧き上がってきた。が、それはすぐに鋭い痛みに変って西真一郎の頭蓋の中を駈けまわり始めた。

目蓋を開いてみる。いや開くというよりは、こめかみの筋肉の力で強引に引っ張り上げる。右目だけがようやく開いた。続いて左目。こちらはどんなに努力してみても、数ミリしか目蓋が持ち上がらない。目の前に赤い靄のようなものがかかっている。それを、痛みを承知の上で、頭をブルンと振って追い払おうとする。案の定、錐で刺すような痛みが走って、西真一郎は思わず顔をゆがめた。

それでも、テーブルの上の物に目の焦点が合ってきた。三分の一ほど飲み残した白乾児のコップが見えた。手を伸ばしてそのコップを摑むと、一気に呷った。透明な液体の強烈なアルコール分が西の喉を焼いた。それで少しばかり気持ちがシャンとした。

ここは何処だったかな、と考える。

先刻から小刻みな音が連続して聞こえている。その音の方向へ、今度は痛みが少しでも軽くてすむように、ゆっくりと顔を向けた。

天井から鉤で吊るされた、豚の仔袋、足、それにどこの物かも分らない内臓などが目に入った。その下に、渋紙色をした中国人の老人の顔があった。老人はランニングシャツ一枚の姿で、痩せて筋ばった腕を細かく動かしながら、片刀で豚の耳を刻んでいた。西の方を努めて見ないようにしていた。

西は、自分の居場所がようやくと分った。腕時計をのぞいてみる。午後九時十五分。記憶がスローモーション

で戻ってきた。

黄浦江沿いの日本総領事館を退出したのが五時四十五分。一度、共同租界の大和ホテルの自室に戻って着替えた。四月の上海には、もう春が来ていたから、昼間ならばワイシャツ一枚という姿でも汗ばむことがあるほどだが、さすがに夜になるとぐっと冷え込む。それを考えて長衣の中国服を着た。下着代りに白い木綿の短いシャツを着て、その上に紺色の夏布で仕立てた長衣を重ね、頭にはボルサリーノのソフト帽をかぶった。出がけに鏡をのぞいてみると、そこには壮年の、だが一寸くたびれた表情の中国人が写っていた。目に何の輝きも見出せなかった。

ホテルを出て四川北路を横浜橋まで歩き、三輪車を拾った。

「河南南路」

車夫が「好」と上海語で答えて、三輪車のペダルを漕ぐ足に力こぶを浮き出させた。

西真一郎は、虹口などといった租界の中の歓楽街よりも、城内とか旧市街と呼ばれる、地元の中国人以外の者はほとんど立ち入ることの無い区域で飲むことを好むようになっていた。この、蘇州河を越えた南側にある周囲五キロ足らずの旧城内には、中国に侵入した諸国列強が寄ってたかって勝手に作り上げてしまった共同租界などの奇妙な植民地文化とは異なる、上海本来の息吹きが感じられ、それが西には好ましく思えた。東京の神田生れ、とはいっても神田も淡路町の外れで生れ育った西真一郎は、下町の雰囲気が好きだった。人間が都市の一部にしっかりと根を下ろしているが故の、地域への愛着とそこから生れる生活感は、東京、上海を問わず共通感覚として西には感じとれた。

三輪車が老北門で停まった。河南南路の中間地点だ。この門をくぐった奥が旧市街となっている。ツンと鼻を突く香辛料や食物を焼く匂いは、まぎれもなく下町のものだ。

「謝謝你」（十銭札）を三枚、車夫の手にねじこむ。

北京官話よりも濁音の多い上海語で、車夫が歯の欠けた口を大きく開いて笑いながら何度も頭を下げた。中国に来て六年。上海に住んで三年。西は言葉には全く不自由しないようになっていた。北京官話も上海語も濁み無く喋れる。日本から来ている商社の駐在員あたりの発音

に較べれば、雲泥の差といえる語学力だ。おそらくは、上海生れで上海育ちの中国人が西の会話を聞けば「ほほう、この人は多分、北京あたりから来たのだろうが、ずいぶんと達者に上海言葉を喋るものだ」と思うだろうし、北京の人が西の北京語を耳にすれば、その逆を考えるだろう。それ程の流暢さであった。広東語も、片言なら何とかなる。東北地方の馬賊達の方言ですら、意を通じる程度の能力は持っていた。

それは、生れついてのものなのかもしれなかった。尋常小学校を卒業して、江古田にある七年制の武蔵高等学校に入学してから、西はめきめきと語学の能力を発揮した。この一風変った私立高等学校は、根津財閥の根津嘉一郎を創始者に抱き、所謂、旧制高校のシステムを無視して中等科と高等科の八年分の教育を七年間でやってしまうという学校であり、しかも成績優秀者は、さらに飛び級制度があったから、わずか十七歳にして帝大入学といった者を次々に生み出していた。

西真一郎は、まず古文と漢文に、その才をあらわした。読めば文意が自然に汲み取れてしまうのである。やがて、漢文は、返り点をつけたものに飽き足りなくなり、日本風の読み方と同時に、中国語の北京官話の発音でも読んでいくようになっていた。中国語は、西の実家が営んでいる乾物問屋の下請けとして毎日、家に出入りしていた李さんという中国人に習った。英語は、オックスフォードに留学したという気鋭の教師に徹底的に叩き込まれた。そうして、武蔵高校を卒業する頃には、既に、西真一郎の語学力は、中国語、英語に於いては、ずぬけたものとなっていた。

だが、それが何なのだ、と、河南南路を歩きながら、三十二歳の西は思う。

角の露店で買い求めた油条（ユーチャオ）を大餅（タービン）で巻いた物を、歩きつつほおばりながら考える。

自分は、一体、何がやりたいのだろう？　毎日、朝の八時四十五分に黄浦路沿いの上海日本総領事館に行く。遅くとも、余程のことが無ければ六時には退出する。そして、その後は、酒だ。白乾児か焼酒か。上海に来たばかりの頃は、バンドと呼ばれる四馬路あたりの租界でブランデーやウィスキーに酔いしれたこともあった。ジャズも聴いた。白系露人の娼婦も抱いた。だが、そういった、西欧が作り上げた上海の特殊な空気には一年で飽きた。

虹口の日本租界に出来たばかりのナイトクラブのダン

サーが、いつもカウンターで冷たい目をしてウィスキーを呷る西に興味を抱いたこともあった。神戸から来たという、そのダンサーと、滬西の住宅街に家を借りて住んだ。これは三か月ともたなかった。西の、あまりにも成り行きまかせの生活態度に愛想をつかせて、女はさっさと、店のバンドのトランペット吹きに御輿を乗りかえて去って行った。

それから、この旧市街に入りびたるようになった。少くとも、この街には、一時の勢いによる浮かれ騒ぎではない、生活の臭いがあった。油条も餅も包子も、それが人々の生活に密に接しているからこそ美味なのだと感じた。

そして、今日もこの松雪路の薄汚れた居酒屋で酒に溺れたらしい。ここ三年間、一日として酒を欠かした日は無かった。西真一郎にとって、酒は、少くとも外見上は正常な日常生活を送っていく為に必要なものとなっていた。

片刀を小刻みにふるい続けている親爺に、西は空になったコップを差し出した。老人は無視して豚の耳を切る作業に熱中しているふりをした。嫌われたな、と西は思った。中国人は泥酔して正体を失う人間を嫌う。いかに飲もうと自分の勝手だが、酔って暴れたり暴言を吐いたりすれば忽ち軽蔑の対象となる。上海に限らず、日本人が中国で最も嫌われている点はそれであった。だが自分は、と西は考えた。多分、日本人とは見えないだろう。

西はフラリとテーブルに手を突いて立ち上がり、親爺の前に大洋一元を放り出した。親爺がやっと西の方を見て、その視線を大洋銀貨に落した。薄汚れたズボンのポケットから釣銭を掴み出そうとする。

その親爺に、北京官話で一言投げかける。

「不要」

店の表に出た。風が冷たくなっている。

酔うための酒になってしまった。如何に自分に言い訳をしようと、それは紛れもない事実であった。酒の美味さを理由に、今夜のように居酒屋に入る。夕食は、ほとんど摂らないに等しい。牛の舌の塩漬けとか豚の耳とかの酒の肴のようなものを口にしながら、飲む。白乾児は、普通の人間ならコップに二杯も続けざまに呷れば、その場でひっくり返る程の強い酒だが、それを二時間余り飲み続ける。ある瞬間を境に、ふっと急に意識が無くなる。そうして、自分の置かれている立場や、それに対する不満、消しようのない過去の記憶、などを総て忘れること

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が出来る。

大概は、今日と同じように泥酔して眠り込み、店の者に起こされるか、時には、いつ誰に放り出されたのかも分らぬまま、裏通りの溝にはまっていたりすることもある。それでも何とか三輪車を拾って、四川北路のホテルまで辿り着き、ただ泥のように眠る。城内に足を踏み入れるようになってからの二年間は、毎日がそんなことの繰り返しだった。

夜風が顔に当り、ほんの少しばかり西の酔いを醒ました。柄にもなく、東京は今頃、桜の季節か、などと考えた。市ヶ谷から四谷にかけての、お濠端の桜並木を思い出した。それから、過去の記憶がゆっくりと甦り始めようとしていた。西は、あわてて頭を振ってその記憶を再び脳の奥へと押し戻そうと努力した。

いつの間にか、西真一郎は河南中路から繁華街である南京東路へとさしかかっていた。銀行や大きな商店が軒を連ねているこの大通りは、もう城内のような下町の風情は無く、三輪車、黄包車（ワンポウツオ）、人力車、そして荷馬車や自動車などがひしめき合っていた。西は、どこか裏通りに入って、もう一杯ひっかけねばならないような気になっていた。

通りを横切ろうとした時、西の左側の方から、けたたましいクラクションの音がした。目をやると、今年発売されたばかりのA型フォードが、この混み合った道路を、まるで羊の群れを追う犬のように強引に突き進んで来ていた。西は舌打ちをして数歩退き、その黒塗りのフォードを通した。制帽をかぶった運転手がハンドルを握り、後部座席には一見して日本の商社のお偉方と分る風采の五十歳がらみの太った男が乗っていて、しきりと運転手をせかしていた。三井か三菱か、それとも大倉か。どちらにしろ、商事会社の大物駐在員が租界の割烹（かっぽう）で軍の参謀あたりと密談でもしに出かけるところなのだろう、と西は想像した。それにしても、フォードの運転は乱暴すぎた。前方を六十歳ぐらいの年老いた苦力（クーリー）が、野菜を満載した黄包車（ワンポウツオ）を引いてノロノロと進んでいた。何度かクラクションを鳴らしても、その老苦力が道を空けないと見ると、フォードの運転手は強引に左側をすり抜けようとした。黄包車の荷台をフォードのバンパーがひっかけた。黄包車はあっけなく横倒しになり、芥蘭やら白菜やらがドッと道に転がり落ちた。それを避けようとして、母子連れを乗せた三輪車がハンドルを切りそこなって傍らの荷馬車に横すべりにぶつかって行き、母子は座席か

ら放り出されて荷馬車の荷台でしたたか体を打ち、道に倒れ込んだ。頬をすりむいた三歳ぐらいの女の子が火のついたような声で泣き出した。黄包車の老苦力は転倒した際に足を痛めたらしく、野菜の山の中にうずくまったままであった。荷馬車の馬が興奮して何度もいななき、鼻から荒い息を吐いた。南京東路は、いまや大混乱となっていた。荷馬車の博労が三輪車の車夫に大声で食ってかかっていた。ワッと集まって来た野次馬が、哇啦哇啦(ワラワラ)とはやし立てる。交通整理の中国人巡捕が何とか近寄ろうとするのだが、野次馬の人垣にはばまれてなかなか現場まで辿り着けずに大声を出していた。

西は、その騒ぎを避けて舗道から一段高くなった銀行の玄関に上った。と、事故をひき起こした例のフォードが見えた。心配顔で車外に出て様子を見ている運転手を、窓から身を乗り出した後部座席の中年の人物が、ステッキでつついた。何やら運転手を怒鳴りつけた。運転手は心残りな表情を見せて、もう一度、老苦力に目を走らせたが、中年の人物がステッキを振り上げたので、あわてて運転席に戻り、フォードを発車させた。

それを見て、突然、西の頭に血が上った。理由はよく分らなかった。ただ、うずくまった老苦力と、頬から血を流して泣き叫ぶ女の子を見て、無性にフォードの座席の人物に対して腹が立った。

あたりを見まわした。一〇〇メートル程先の、南京東路が江西中路と交わる角のところで、一台のトラックが停車した。フォードが今しがた北へ向けて曲がったばかりの角だ。トラックから憲兵の印しの黒衿を立てた日本陸軍の下士官が二人下車して、こちらへ向かって歩き始めていた。西は、彼等の来るのとは反対側の道の端を走って、そのトラックを目指した。酒のせいで、たった一〇〇メートル走るのに息が切れた。ステップに飛び上がってトラックのドアを開く。ドアがロックしてあるどころか、不用心にもイグニッションキーまでが差しっぱなしになっていた。

運転席に座った西は、憲兵たちの姿に目を配りながら、キーを回してからセルボタンを引いた。エンジンは充分に暖まっていて一発でかかった。ブレーキを外し、クラッチを踏んでギアを一速に入れ、前照灯を点けた。その時になって、やっと憲兵たちが自分の車の異常に気づいた。腰のホルスターの革蓋を開きながらあわてて江西中路へと駈け戻り始める。西がトラックのアクセルを踏み込んだ。排気管から、ブワッとばかりに黒煙を吐いてト

ラックはタイヤを鳴らして発進した。

ようやく交差点まで駈け戻って来た憲兵の一人が、手にした南部大型陸式拳銃を構えてトラックめがけて一発射った。荷台の後ろの方でカーンという音がしたが、西は構わずギアを二速に叩き込んでスピードを上げた。

江西路が北京東路と交わるあたりで、西の目が先程のフォードのテールランプを捉えた。フォードは最早、逃走中という気配も見せず、ごく当り前のスピードで走っていた。西はトラックのギアを、ダブルクラッチを踏んで三速から二速に落した。そのまましばらく、三〇メートルほどの距離をおいてフォードの後を走った。

フォードは北京東路を直進し、黄浦江沿いの中山路へと進んで左折した。そのままガーデンブリッジを渡って蘇州路から租界の虹口あたりへ行くつもりらしい。ガーデンブリッジを越える前に勝負をつけよう、と西は心の中でつぶやいた。二速のままで、アクセルを踏み込んだ。トラックのエンジンが唸りを立てた。

黄浦公園に入ったところで追いついた。バンパーとバンパーが接触するほど近づいて、やにわにトラックの前照灯を上向きにした。フォードのバックミラーの視界が完全に潰れたのだろう。フォードの運転手があわててアクセルを放した。その隙にトラックを左側の反対車線に乗り入れる。トラックの頑丈なバンパーがフォードの後部フェンダーと並んだ。西はハンドルを右に切った。ガツンと衝撃がきた。あちらさんの衝撃はこんなもんじゃないはずだ、と西は考えて白い歯を見せてニタリと笑った。なにしろ、あちらさんは、攻撃されることはおろか追跡さえも予想していなかったのだからな。ハンドルを一度戻して、もう一度体当りを食わせようとした。フォードの運転手が、今度は必死でアクセルを踏んで避けようとした。フェンダーではなく、バンパー同士がぶつかり合って、火花が散った。西も、フォードと並走したまま思いきりアクセルを踏む。また鼻先がフォードのフェンダーを捉える。ハンドルを右へ切る。衝撃がきた。フォードが一メートル近く横滑りした。一気に追い抜いて前へ出ようかと考えた。その時、後部座席の左側の窓がスルスルと巻き下ろされるのが西の目に映った。例の中年の人物が、顔を真赤にしていた。その腕が窓の外に突き出される。男の手に小型の自動拳銃が握られているのを見た西は、スッとアクセルを緩めて、トラックを再びフォードの後ろにつけた。

前方にガーデンブリッジが見えた。この先は、もう脇

道も無いからフォードを逃がす心配はなかった。勝負時だと感じた。フォードのスピードが落ちていた。三回目の激突で、後部フェンダーの鉄板がへこんでタイヤと接触しているらしい。西は二速で思い切りエンジンの回転を上げながら再び反対車線へ入った。ひっぱれるだけ二速でひっぱっておいて、ギアを三速に叩き込んだ。フォードの横を抜ける。その時、パンパンという銃声が西の耳に届いた。同時に運転席のドアの下部にカンカンと弾丸の当る音がした。それからもう一発。これは角度が良かったらしく、ドアの鉄板に突き刺さってミシリと音を立てた。どうやら38口径のブローニングあたりらしかった。西は無視してフォードを完全に追い抜くとハンドルを右に切った。フォードの運転手があわててブレーキを踏もうとした。その瞬間に、西はハンドルを一杯に左に切りトラックのブレーキを床まで踏みつけた。トラックのタイヤが悲鳴を上げ、車体が大きく左へスリップした。フォードの運転手は、何とか目の前で横滑りを始めたトラックをハンドルさばきで避けようとした。トラックの前方左側の隙間をすり抜けようと、ハンドルを左に回してアクセルを踏んだ。西は、その時には既に車体のコントロールを取り戻していて、目の前を通り抜けようとするフォードめがけて猛然とトラックを襲いかかからせた。衝突の寸前に、西は一度左に振ったハンドルを大きく右に切り返し、アクセルを踏みつけながらサイドブレーキを一瞬で引き上げていた。

トラックの車体が巨大な独楽のように凄まじい勢いで右に急回転した。つんざくようなホイールスピンの音と、タイヤのゴムの焼ける匂いが黄浦公園の木々で眠りについていた鳥たちを震え上がらせた。トラックは車体全体をピンボールゲームの射出装置のように使って、フォードを弾き飛ばしていた。

フォードは、見事に六メートルほど宙を飛んだ。そして、鼻面から蘇州河べりの岸壁のコンクリート柵にぶち当って行った。その衝撃でバンパーを柵にひっかけて半回転し、柵から伸びている鉄鎖を千切り、後部を岸壁から河へと突き出した形でやっと停止した。前輪に鎖がからみついているのと、ねじ曲がったバンパーが柵にひっかかっているために河には落ちないものの、まるでプールの飛び込み台にでもなったかのような不安定な体勢でユラユラと揺れていた。ボンネットはめくれ上がり、後部のドアも二枚とも衝撃で開いたままとなっていた。運転手はフロントグラスで頭を痛打したらしくハンドルを

抱えて失神していた。

西真一郎はトラックを停めると、その宙ぶらりんになったフォードへと歩み寄った。驚いたことに、後部座席の人物は額にほんの少し血を滲ませてはいるものの、気も失っておらず無事であった。しかし、下手に動けば車のバランスが崩れて河に転落すると知ったらしく、前部シートの背を抱くようにして車内でじっとしていた。中国服姿の西を見たその男は、あわてて足で床を探った。だが、お目当ての拳銃は衝突の際にどこか車外に飛んで行ってしまったらしく、そこには無かった。

西がコンクリート柵の所まで来て歩みを止めた。男は不安定な車内で、それでも必死に威厳をとりつくろおうと努力し、人差し指を西に向けて突き出すと日本語で叫んだ。

「貴様は誰か。儂を三井物産上海支店の者と知っての狼藉か。このままでは済まんぞ」

その、立川文庫から抜き読みしたような大時代な台詞に苦笑しながら、西は鎖にからまっているフォードの前輪を足で蹴った。車体がグラリと左へ傾いた。

「わ、わ、待て、金ならやる」と、男がわめいた。西はかまわずに、もう一度、今度は少し力をこめて前輪を蹴った。車体が、真横に近い角度まで傾いた。男は必死で背もたれをひっかいていたが、ついに自分の体重を支えることが出来なくなり、開いたままのドアから、悲鳴を上げながら蘇州河めがけて滑り落ちて行った。一瞬の空白の時間をおいて、大きな水音がした。それに続いて、両手でがむしゃらに水面を叩く音がした。

次に、西の耳元でガチャリという金属音が聞こえて、首筋に銃口が押しつけられる冷たい感触があった。租界憲兵隊のものらしい車の停車音に気づいていた西は、悪びれずに大人しく両手を肩の上まで上げた。

四川北路の租界憲兵隊本部に連行された時、西真一郎は無意識のうちに口元にうす笑いを浮かべていた。逮捕された時、無抵抗だったにもかかわらず三八式歩兵銃の銃床で胸と脇腹を何度も殴られたために、肋骨がキリキリと痛んではいたのだが、その笑いはどうしても唇から去らなかった。

三階の、窓の無い小部屋に連れ込まれた。すぐに曹長と軍曹が入って来た。西はどこかで見た顔だと思った。すぐに思い出した。南京東路で西にトラックを盗まれた二人だった。二人とも、怒りで赤鬼のような形相をしていた。

軍曹の方が、西の座った椅子に歩み寄ってやにわに平手打ちをくわそうとした。別に手錠をかけられているわけでもないので、唐手の上段受け払いの形で、西はそのビンタを苦もなくカットした。軍曹の顔が、今度は蒼白になった。

「貴様ァ、チャンコロの分際で」とわめいて西の胸ぐらを摑み、椅子から立たせた。それには抵抗せずに素直に立った。一八〇センチを越える長身の西を見て、一六〇センチそこそこの軍曹が嫌な顔をした。次の瞬間、西の予想どおりに、股間を狙った膝蹴りがきた。西は同時に自分も膝蹴りを出してそれをブロックした。軍曹のバランスが崩れ、よろめいて一歩下がった。それでも、まるで相撲の張り手でもくわすかのように全体重を右手にかけて又ビンタを出してきたから、今度は右腕をからめてそれを止めた。軍曹の肘の下に手の甲を当てて上にねじると、ウグッという声を洩らして顔をゆがめた。そうしておいて、のしかかるようにして自分の顔を数センチの距離まで軍曹の顔に近寄せ、ゆっくりと明瞭な日本語で言った。

「自分は、上海総領事館付武官補佐官、大日本帝国陸軍航空兵少尉、西真一郎である」

それから、手を放して自分の顔を指さし、一度大きくうなずいてみせてから言った。

「本物だぜ」

憲兵曹長が確認の電話をかけるために部屋を出て行った。軍曹は、再び椅子に腰を下ろした西を、親の仇でも見るような目付きで睨んでいた。西は、また、笑いがこみ上げてくるのを感じた。今度は口元だけの笑いでは止まらず、西は最初はクスクスと、そして、いつの間にか大声を上げて笑い続けていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com